

一番の安全対策は「ヒグマとの遭遇を避ける」 根室市が「ヒグマ対策を学ぶフィールド講座」を開催

3月28日、根室市はネイチャーセンターでヒグマ対策の専門家を講師に「ヒグマ対策を学ぶフィールド講座」を開催。参加した市民など約30名がヒグマの被害防止対策の座学を受けたあと、近くの東梅自然学習林で実際に森林散策時の注意点やクマスプレーの使い方など学びました。

根室市HPによると、2025年度の市内のヒグマ目撃情報は75件でした（前年度は127件）。市やハンターで構成する鳥獣被害対策実施隊による捕獲の成果と思いますが、一方で「面倒だからヒグマを発見しても通報しない」という住民の方もいるようです。

山菜採りなどで山に入る方が増える春先はヒグマの活動も活発になります。参加した市民らはヒグマの生態や習性、被害防止の方法を学びました。講師は斜里町を拠点に鳥獣被害対策の事業を手掛ける合同会社ワイルドライフプロの葛西真輔代表です。

なお根室市はこれまでも春クマ駆除のハンター研修など専門業者の支援のもとヒグマ対策を進めてきました。市は新年度からワイルドプロ社と委託契約し、見回りや箱わな設置、エサの交換、またヒグマ講座の回数増など取り組みをさらに充実させていく方針、とのことでした。



※使用済みのクマスプレー缶や練習用スプレー缶で実際の操作を体験する参加者。

講演で葛西氏は令和2年の道内のヒグマ生息数は1万1700頭と30年間で2.2倍に増えており、道の令和16年までに35%減を目指す目標を紹介。これまでヒグマを保護する政策は上手くいったが、現在は増えすぎた個体を適正に管理（捕獲）する政策に変わりました。生息域が広がり、本来は憶病なヒグマが人間の食べ物などで学習して民家に侵入するなど行動がエスカレートする場合や、極端に人慣れした個体は捕殺するしかない指摘します。

一番の安全対策はヒグマとの危険な不意の遭遇を避けるために、自分の存在を知らせること。特に視界の悪い場所では声を出したり、手を叩いて、その後、クマが反応する物音が無いか確認することが大事など対処法を、葛西氏自身も過去にヒグマに襲われたときの経験談を交えて説明していました。

講演のあと参加者は東梅学習林に移動して、手を叩いて知らせる練習やクマスプレーの使い方を体験しました。

高潮被害のリスクが高まっている？ 根室市ウニ種苗センター



視察した3月上旬はこれから稚ウニを飼育する水槽内で餌にする「アワビモ」が育てられていました。

新年度、根室市ウニ種苗センターは取水管の改築工事を約1億7200万円で行います。

ウニ種苗センターは平成3年に市が建設し、市と各漁協で組織する運営委員会が管理されている公設民営の施設です。管理組合は歯舞漁協が担っています。当初は年間500万粒の種苗生産を計画していましたが、技術力等の向上や、2021年に発生した赤潮被害からの資源回復に向けて種苗の増産を進め、現在は安定的にエゾバフンウニを約780万粒、さらに種苗の大きさも当初の計画時点（5mm）よりも大きなサイズで出荷できるようになっているそうです。

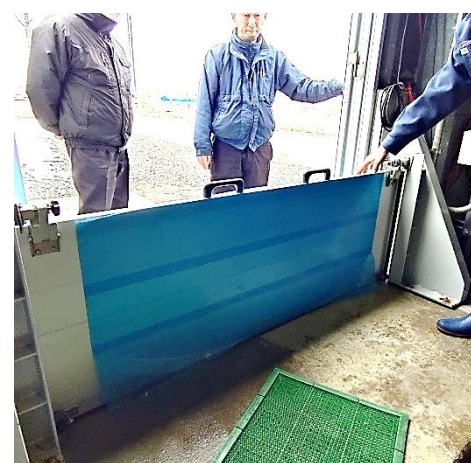
また同施設では「キートセラ」というウニ幼生のエサも自給いで生産しています。これは珍しい取り組みで、他地域の種苗センター等では飼料は購入しているそうです。

今後とも地域のウニ資源の維持増大のために重要な施設です。一方で築35年経過し老朽化や、潮風など過酷な環境から今後も多くの補修費用が見込まれます。

市担当課は（施設規模のあり方含め）「10年・20年先のウニ漁業の将来展望を見据え、高台移転や建て替えなど今後の方向性について漁協と議論を深めたい」と答えていました。

2014年に発生した爆弾低気圧に伴う高潮ではウニ種苗センターも被害を受けました。施設内に1mを超える浸水があり、取水ポンプやボイラー等が破損。その後、センターは様々な高潮対策を進めてきました。

しかし、それでも根室半島が年々地盤沈下している影響なのか、近年は大潮時に温根元漁港内の道路が冠水する事態が増えています。歯舞漁協の記録では昨年12月から2月までの約3か月間で計11回もウニ種苗センター前の漁港道路が冠水したとのこと。職員の話では車も通れない状況になるそうです。3月の予算委員会で市担当課は「従来よりも高潮の被災リスクは高まっている」と説明します。



高潮対策で施設の出入り口に手動で設置する止水版が準備されています。